

ITI Scholar NEWS vol.5 (2022, Aug.) ITI Section Japan



ITI スカラー通信第 5 号をお届けします

暑さが続く毎日ですがいかがお過ごしでしょうか。

それでも季節は秋へと変わりゆくさまも見せ始めております。

ITI Scholarship program も、1 年という期間の終盤を迎えております。

今回の通信では、その 1 年間の経緯や成果などをお伝えさせていただきます。

上妻 渉先生

**University of Connecticut
(Farmington, CT, USA)**

8月の日差しが強く、真夏を肌で感じる今日この頃です。私の留学先のコネチカットは緯度が高いため最高30度程度で、日本と比較して湿度も低いため私からすると快適な夏を過ごせています。

長かった ITI Scholar 生活もあっという間に1年が過ぎ、終盤を迎えようとしております。

臨床に関しては、中盤から終盤にかけて組織の一員として馴染めてきたこともあり、自身の患者も担当され始めました。レジデント同様に埋入手術を含め全てのステップを現地のプロトコルに沿って経験することができたのは貴重に思います。専門医取得のために徹底した資料採取とエビデンスに基づいた治療計画が要求されます。オペ前のカンファレンスではオペレーターが自身のケースについて発表しますが、教官から専門医試験に模した形で口頭試問が行われ、それに対してエビデンスを用いて回答する流れになります。アメリカではインターディシプリナリーな治療が基本とされておりますが、専門性を重要視する一方でその連携の必要性から時として治療の円滑さや一貫性にかけてしまうこともあります。その観点からするとインプラント治療において埋入から補綴まで1人のドクターが担当する当科の制度には納得する面も多く感じます。

研究に関しては自身で考案した企画が採用され当分野の Taylor 教授の得意とするインプラントの機械的な研究を行なっています。1年という短い期間では残念ながら研究を終えることはできませんでしたが、Scholarship 後も分野の一員として研究を継続する機会を得られたことには大変感謝しております。

この1年を通して ITI Scholarship はその研修の中身だけではなく、異国での文化を経験でき、また世界をベースに様々な方と触れ合う機会が多く、実りあるプログラムだと感じます。これから留学を考えられる先生方には是非お勧めしたいものであり、私自身何か力になれることがあれば協力させていただきたい気持ちでいっぱいです。もし申請される際は施設によってプログラムの中身は大きく異なるため、可能な限り情報を集めることをお勧めします。

最後に改めましてこの ITI Scholar 通信を通して ITI Section Japan の皆様方から応援の声をいただけたことに感謝いたします。これからの ITI Scholar の先生方のご活躍や ITI Section Japan の発展と、日本の明るい未来を心よりお祈り申し上げます。



コネチカット大学補綴学分野レジデントの卒業パーティでの写真。右から3番目が筆者



Atlantaで開催されたITI USA Section MeetingでのITI Scholar集合写真。1番右が筆者

横田 潤先生

Queen Mary University of London (London, UK)

Shakeel 教授を筆頭とした我々QMUL のインプラント治療は齶蝕や歯周疾患に伴う一般的な欠損症例でなく、紹介状持参の患者のみ受診可能なゲートキーパー機能を生かした大学病院ならではの治療を行っており、大きく ①先天欠損 ②外傷 ③広範囲顎骨切除 ④他院からのトラブル症例という 4 つのカテゴリーに分類されます。ロンドンの東に位置する QMUL 周辺地域には元々南アジア系移民が多く住んでおり、人種の影響もあってしばしば先天欠損症例に遭遇します。一概に先天欠損症例といっても患者の年齢、性別、欠損歯数などは千差万別です。日本で難病指定されている外胚葉形成不全症に伴う無歯顎小児患者も来院され、私が実際の治療に従事したことを今も鮮明に記憶しています。

これらの症例に対してインプラント分野のみならず、小児歯科や矯正の知識も非常に重要で、QMUL では各分野での情報共有、レベルアップを目的とした Hypodontia meeting が毎月開催されています。ここでは先天欠損症例だけではなく、象牙質形成不全症や鎖骨頭蓋遺骨症への症例報告もあり、興味深く拝聴しておりました。また私自身もサージカルガイドを用いた癒合歯のヘミセクション、歯の移植症例について発表の機会を頂戴しました。特に先述のヘミセクション症例は小児歯科の先生と共に実際の治療計画立案からサージカルガイドのオーダー、実際の手術に立ち会い、また QMUL 主催の Digital Dentistry Conference でポスター発表、優秀ポスター賞を頂くことができました。

このように本センターではインターディシプリナリー・アプローチに対して積極的に取り組んでおり、今後はデジタルデバイスを組み合わせたさらなる発展を将来の展望としています。1 年という限られた期間の中、これまでの知識を生かして、小児歯科や矯正を含めた様々な症例の治療計画の立案を任されたこと、そしてチームの一員になれたことは私にとって大きな財産となりました。

最後に改めましてこのような貴重な機会を頂き、ITI section Japan 関係者各位の皆様にご心より感謝申し上げます。またロンドンより一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息と、皆様のご健康をお祈り申し上げます。



ITI Scholarship program 終了後の Certificate 授与
(左から 3 人目:筆者、右から 4 人目 Shakeel Shahdad 教授)

ありがとうございました。

